

日本における反アパルトヘイト運動とその記録

The Anti-Apartheid Movements in Japan and Their Records

HIRANO Izumi

平野 泉

…一昨年この“フリーダム・デイ”⁽¹⁾に、私たちのなかの少数の者は、タンガニイカ（いまのタンザニア）の首都ダレス・サラムで開かれたその集会に出席することができた。

そのとき、壇上に立った司会者は、

「今日、アルジェリアでは、われわれのために大デモンストレーションが行われている。北京では大集会がもよおされている。モスクワでも……」

と語った。だが、日本の都市の名前は、ついに1つも言及されなかった。[野間 1965:2]

…その他いろいろな国の反アパルトヘイト国際運動のことが書かれているわけなのですが、日本のことは全然入っていないのです。ヨーロッパのほとんどの主要国が入っていて、アメリカ、カナダ、それからオーストラリア、ニュージーランド、それからアジアだと、インド、中国が入っているのですが、日本の章はなかったのです。これを見て、私は大きな衝撃を受けました。[牧野 2018:26]

はじめに

1963年2月、アフリカ研究者の野間寛二郎は、社会党議員の田中稔男らとともに、タンガニイカのモシで開かれたアジア・アフリカ人民連帯会議に出席した。その際、南アフリカ共和国（以下、「南ア」という。）でアパルトヘイト体制とたたかうアフリカ民族会議（African National Congress: ANC）のオリバー・タンボ議長から、非白人の国としては日本のみが南アと外交・経済関係を保っていることをどう思うのか？と問われるとともに、アパルトヘイトの厳しい現実を突きつけられた。帰国後、アジア・アフリカ連帯委員会（以下、「AA 連帯」という。）に南ア人種差別反対実行委員会準備会を結成した野間は、同年6月に作家の五味川純平とともにダルエスサラームを訪れ、冒頭に引用した場面に遭遇したのである。世界の反アパルトヘイト運動における日本の「不在」という事実を、誠実に受け止めた野間は、日本の反アパルトヘイト運動の一つの核となっていく。

その数十年後、アパルトヘイト撤廃後に南ア研究を始めた牧野久美子は、南アを研究するプロセスで出会う日本人の多くが、かつて反アパルトヘイト運動に関わっていたことに気づく。そして、グローバルに展開した反アパルトヘイト運動について書かれる文献に日本の運動がほとんど登場しないことに衝撃を受け、日本の反アパルトヘイト運動関係者への聞き取りや運動記録の保存へと踏

み出していくのである。

2017年、国立歴史民俗博物館で開催された企画展示『「1968年」—無数の問いの噴出の時代—』は、「社会運動の時代」に人々が提示した様々な「問い」を、現代に生きる私たちひとりひとりがあらためて受け止め、考えることを求めた。筆者が勤務する立教大学共生社会研究センター（以下、「センター」という。）の所蔵資料からも、「ベトナムに平和を！市民連合」（以下、「ベ平連」という。）に関する資料と、横浜新貨物線反対運動に関する資料が多数展示され、これらの運動に関わった人々の「問い」を、訪れた人に投げかけた。しかし、これら二つの運動とほぼ同時代に始まり、とくにベ平連とは問題意識や運動の性格などの面で共通点も多い反アパルトヘイト運動は、この展示にも登場せず、その「不在」は、野間や牧野が感じた「不在」と呼応するかのようだった。

もちろん、展示という限られた時空間に「無数」の問いをおさめきれないのは、当たり前のことだ。しかし、例えば、日本の社会運動研究をリードした道場親信による、この時期の社会運動の詳細な「年表 [1961～1980年]」[岩崎稔他編『戦後日本スタディーズ②……60・70年代』、紀伊國屋書店、2009、pp.335-379]にも、反アパルトヘイト運動についての言及はない。

本稿は、そうした空隙を埋めるためのささやかな試みである。まず、センターが所蔵する日本の反アパルトヘイト運動関連資料について概要を紹介し（第1章）、この運動に参加した人々が記録に残した言葉が、展示で示された様々な運動の言葉とどのように響き合っているかを示す（第2章）。最後に、アパルトヘイトおよび反アパルトヘイト運動とアーカイブズの関係についても簡潔にまとめておくことにしたい（第3章）。

1. センター所蔵の反アパルトヘイト運動資料群

1-1. 受贈の経緯

センターが現在所蔵する反アパルトヘイト運動の資料群は、管理上二つの群に分かれている。「反アパルトヘイト運動関連資料・下垣桂二氏寄贈分」（コレクションID:R09）、「反アパルトヘイト運動関連資料・楠原彰氏寄贈分」（コレクションID:R10）である（写真1）。地方公務員だった下垣は、1970年から大阪でアパルトヘイトの問題に取り組み始め、現在も「関西・南部アフリカネットワー



写真1 反アパルトヘイト運動関連資料
(R09, R10) 書架

ク」の世話人としてアフリカの問題とかわり続けている。國學院大學名誉教授（教育学）の楠原は、60年代初頭に野間寛二郎と出会い、のちに「日本反アパルトヘイト委員会」（Japan Anti-Apartheid Committee: JAAC）で全国の運動を結ぶ役割をした人物である。主にこの二人の自宅に資料は保存されていたが、それらがセンターへ寄贈されるには、前章に登場した牧野の力が必要だった。

前述のとおり、欧米やアフリカ諸国に比べ、「日本の反アパルトヘイト運動については、研究、資料のアーカイブ化ともに遅れをとって」

[牧野 2015:3] きたことを研究活動のなかで痛感した牧野は、楠原・下垣ら運動関係者への聞き取りにより、相当量の資料が関係者の自宅に保存されていることを知る。とりあえず取ってはおいたものの、『「そのうちに粗大ごみとして捨てることになるかな」なんて思っていた』[下垣 2018:17] という運動当事者の気持ちを変えたのは、資料が確実に保存され、誰にでも利用できる形で公開されることの意義を研究者として実感してもいた牧野の働きかけだった。そして、全国各地の反アパルトヘイト運動の資料については下垣が、東京を拠点とする活動については楠原を中心として、関係者へ幅広い呼びかけがなされた。それにより、二人の手元に保存されていた資料に加え、機関誌のバックナンバーなどが全国から集められ、欠けている部分が埋められていったのである。また、牧野を研究代表者とする研究プロジェクト「反アパルトヘイト国際連帯運動の研究：日本の事例を中心として」(JSPS 科研費基盤研究(C), 課題番号 26380227) の一環として資料リストが作成され、重要資料についてはデジタル化も行われた。その成果の一部は立命館大学生存学研究センター・ウェブサイト上の「反アパルトヘイト運動」⁽³⁾ ページで公開されている。

そうした活動と並行して、資料の落ち着き先についても考えていた牧野は、まず 2013 年 6 月にセンターを訪れ、資料整理の方法や収集方針などについて確認したのち、2014 年 5 月には楠原・下垣とともに来館し、寄贈可能性について内々に打診を行っている。そして資料収集がほぼ終了した 2015 年 12 月に、正式に 3 者からセンターへ寄贈の意思が伝えられ、2016 年 1 月～2 月にかけてセンタースタッフが資料の総量や内容を確認し、センター運営委員会に報告。2016 年 3 月 8 日に運営委員会が受け入れを決定した後、2016 年 3 月 23 日に下垣保存分、30 日に楠原保存分がセンターに搬入され、センターでの整理作業を経て利用に供されている。

1-2. 資料群が生まれた背景

では、この資料群を生み出したのはどんな人たちのどんな活動だったのだろうか。

1962 年 3 月 16 日、東京全電通会館で「AA 作家会議・カイロ大会報告講演会一ペンを力として」が開催される。この集まりに参加した人々の間から、「もっとアジア・アフリカのことを知りたい!」という声上がり、同年 9 月に「アジア・アフリカの仲間」(以下、「仲間」という。) という小さなグループが誕生した。その「仲間」の一人が、資料寄贈者の楠原彰である。「仲間」たちは、1963 年 5 月に AA 連帯に設置された南ア人種差別反対実行委員会準備会(野間寛二郎が中心、先述)に「南ア班」として加わり、アパルトヘイト反対の署名活動や、アパルトヘイトに関するスライドを作成し、小さな町工場を巡回上映するなどの地道な活動を進めていく。しかし AA 連帯を中心とする運動は、1964 年に中ソ対立の影響を受けて分裂の危機に直面。楠原らは「南アフリカ問題懇話会」(以下、「懇話会」という。) を立ち上げた野間とつながりつつ、アフリカについて学び、機関誌を発行するなどの活動を続けた。また 1965 年頃からは、東京大学や明治大学など、大学内にアフリカ問題に取り組む学生サークルが誕生する。1969 年 5 月、その一つである東大の学生グループ INKULULEKO (ズールー語で「自由」の意) と、前出の「仲間」が中心となって「アフリカ行動委員会」(Japan Anti-Apartheid Committee : JAAC-Tokyo) が生まれ、INKULULEKO の大岡俊明や「仲間」の楠原が、その中心的なメンバーとしてかかわっていくことになる。JAAC-Tokyo は 1970 年 6 月 26 日、懇話会とともにフリーダム・デーのデモ(ペ平連と同じく清水谷公園から出発)

を実施。同年、3人で始めた読書会をもとに大阪で「こむらどアフリカ委員会」(JAAC-Osaka)を立ち上げた下垣桂二も1971年のこのデモに参加して楠原と出会う。

JAAC-Tokyoは、「日本反アパルトヘイト委員会」(JAAC)とゆるやかにネットワークする日本各地の反アパルトヘイト運動体(JAAC-Osakaや「静岡アフリカに学ぶ会」など)と連携するとともに、JAACが海外活動家の招聘、南アの新聞への意見広告掲載、あるいは英文ニューズレターの発行といった国際連帯運動を展開する際の窓口の役割も果たした。

一方、JAAC-Osakaは、長年人権・差別問題とたたかってきた部落解放同盟や、関西電力によるナミビア産ウラン購入への抗議をきっかけに反原発運動団体などと多様な協力関係を築いていく。また1987年のアラン・ブーサク牧師招聘の際には、木川田一郎・日本聖公会首座主教を代表者として「反アパルトヘイト関西連絡会」を結成、教会関係者とのつながりも深めた。

1983年から世界各地を巡回した反アパルトヘイト国際美術展の日本巡回展(1988-90年、主催はアートディレクターの北川フラムと各地の美術家等で結成された「アパルトヘイト否(ノン)！国際美術展」実行委員会)にあたっては、全国各地のJAACメンバーが地域の様々な運動と連携して開催に協力した。世界の著名画家による反アパルトヘイト絵画を積んだ特殊トラック「ゆりあ・ぺんぺる号」は沖縄を起点に、500日間で国内194カ所を巡回し、展覧会を訪れた人の数は計38万人にのぼった。また1990年10月のネルソン・マンデラ来日時には、東京と大阪で市民による歓迎集会被開催され、下垣が事務局を担当した大阪の集会には2万8千人が集まったという。

その後、南アの状況が急速に変わり、アパルトヘイト関連法が廃止されると、JAAC-Tokyoの活動は自然に終息した。しかし、JAAC-Osakaは「関西・南部アフリカネットワーク」と名称を変え、日本に根強く残るアフリカ人への差別や偏見をなくすべく現在も活動を継続している⁽⁴⁾。

こうした背景、および前節に示した寄贈経緯から、二つの資料群は、管理上は別扱いでも、やはり一つの全体としてとらえるべきであろう。また、資料を作成・利用・保存していた個人の個性や仕

表1 反アパルトヘイト運動関連資料・下垣桂二氏寄贈分(R09)編成(センター目録を簡略化)

シリーズ	ファイル番号	年代	概要
シリーズ1 主題別ファイル	1101 -1403	1972 -2008	サブシリーズ1: 下垣桂二氏が所属した団体の資料。 サブシリーズ2: 関連団体の資料。 サブシリーズ3: 各団体が発行した機関誌のファイル。 サブシリーズ4: 上記サブシリーズには収まらないファイル2冊。
シリーズ2 ノート	2001 -2016	1971 -2000	こむらど事務局会議や講座・講義のためのメモ書き、和訳の草稿などに使用されたノートである。
シリーズ3 封筒詰め等 一括資料	3000 -3011	1970 -1995	アンケート、録音したテープからの文字起こしの原稿、ノート、書簡などが封筒にまとめられていた。反アパルトヘイト関西連絡会の会計記録やマシイレ合唱団コンサート関連の資料など。
シリーズ4 書簡	-	1972 -1999	主としてこむらどアフリカ委員会宛の書簡。現時点では非公開。
シリーズ5 その他	5001 -5008	1979 -1995	シリーズ1～4には含まれないピラ、写真、冊子など。
シリーズ6 一般刊行物	6001 -6002	1983 -1994	一般向けに販売された書籍等。

表2 反アパルトヘイト運動関連資料・楠原彰氏寄贈分 (R10) 編成 (センター目録を簡略化)

シリーズ	ファイル番号	年代	概要
シリーズ1 ファイル	1001 -1013	1963 -2014	ファイルにまとめられていた資料群。様々な形態・内容の資料がファイリングされており、次の二つのサブシリーズに分類。 サブシリーズ1: JAAC 関連資料 JAAC の活動の中で作成された (と考えられる) ファイル。 サブシリーズ2: ファイル「反アパ資料 雑」 楠原が作成あるいは受領したと考えられる、紐で括られたファイルの束。それぞれに、「反アパ資料 雑 ①」、「反アパ資料 雑 ②」というラベルが添付されている。
シリーズ2 ノート	2001 -2010	1984 -1993	JAAC の東京事務所で、メンバー間の連絡、ミーティングの記録、電話内容のメモなどのために使用されていたノート。
シリーズ3 ミニコミ・冊子 など	3001 -3007	1964 -1995	南アフリカ問題懇話会・アフリカ行動委員会をはじめとする様々な団体や個人が反アパルトヘイト運動のために作成・頒布したミニコミ・冊子など。
シリーズ4 一般刊行物	4001 -4013	1972 -1994	アフリカに関する一般刊行物。

事のしかたが、ある程度編成に現れてはいるものの、含まれている資料の形態は、ノートや書簡、機関誌・ビラ類、新聞切り抜きや雑誌コピーなどの参考資料、その他何らかの基準でファイルや封筒にまとめられた多様な資料、書籍や AV 資料などと似通っている。参考のため、表1及び表2に、両資料群のシリーズ編成を示しておく。

また、楠原からは2017年11月に「アフリカ行動委員会ノート」(1969～87年)13冊および「ビラ・資料類」(1970～71年)ファイル2冊を追加で受贈したが、これらについては未整理のため表1・2には含まれていない。

2. これらの記録が語ること

2014年10月11日、楠原は、牧野の研究プロジェクトによる公開研究会「反アパルトヘイト運動の経験を振り返る」で基調報告を行い、反アパルトヘイト運動には様々な NGO や宗教団体、労組、そして「特別に名乗らないで運動をしていた人たちが」関わっていたので、「日本の反アパルトヘイト運動は行動委員会が担った、みたいなことにならないように気をつけなければならないと思っています」と語っている [楠原 2015a:4]。現在センターで所蔵している反アパルトヘイト運動の記録に、そうした人々全ての思いと行動が書き込まれているわけではないし、JAAC とつながった人たちの声ですら、全体のほんの一部が残されているにすぎない。そうした限界はあるものの、反アパルトヘイト運動に関わった人々の抱えていた思いを、60～70年代前半に発行された機関誌を中心に拾ってみることにしよう。

2-1. 南アは「遠い」のか

1963年12月には、南ア人種差別反対実行委員会準備会 (のち「南アフリカ問題懇話会」) の『南ア通信』が、1964年8月には、「仲間」の『アフリカ・日本』が創刊された。少し遅れて、1969年には JAAC-Tokyo が『アフリカ行動委員会ニュース』を、そして1970年に活動を開始したこむらどアフリカ委員会が、1972年に『こむらど』を発行し始めている (写真2)。

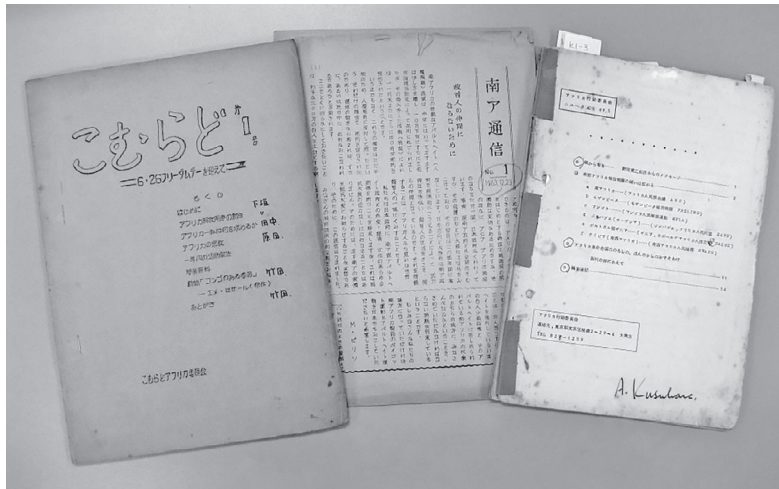


写真2 反アパルトヘイト運動の機関誌
左から『こむらど』、『南ア通信』、『アフリカ行動委員会ニュース』
(いずれも No.1)

当たり前のことだが、これらの機関誌で用いられる言葉—帝国主義、植民地、被害と加害、差別と抑圧、そして解放—は、同時代の他の運動の言葉と重なり合う。また、中ソ論争を契機とした運動の分裂の経験という点も共通しているためか、運動のしかたも似ている。組織の理屈にしばられない。中央を持たない。一人一人が個として考え、動く。そして、ゆるやかにつながる。実際、「仲間」のメンバーの多くが、1965年4月24日のベ平連最初のデモに参加している。また、楠原も後年、運動のしかたにおいてベ平連に「影響を強く受けていた」[楠原2015a:7]と語っている。

しかしその一方、『南ア通信』No.30 [1968年4月, p.3]には、「ベトナムとアメリカで忙しい、いま、アフリカにまで眼が向けられるか、という人がいます。日本人の頭と眼は、いつからそのように小児化したのでしょうか」と問う野間がいる。楠原もまた、「南ア問題の重要性を訴える私たちの呼びかけにたいして、ヴェトナムが重要だから、ヴェトナムの問題で忙しいからと、私たちに耳をかそうとしなかった“学者・文化人・革新的政治団体”のことも、忘れられないのである」[『アフリカ行動委員会ニュース』No.2, 1969年7月, p.4]と書いている。「忙しい」と言ったのがどんな団体の誰なのかは不明だが、当時の日本人がベトナム問題で手一杯だった様子がうかがえる。

ところで、東京・水俣病を告発する会の『苦海』第1号 [1970年8月] 掲載の「本会の結成にあたって」にも、こんな文章がある—「我々の中には、遠いベトナムの戦火に心を痛め、怒りに身を震わせる者も少なくなかったであろうが、水俣病問題は遠い南の村の一不祥事としか認識し得なかった者もまた少なくなかったのではないだろうか。思えば恥ずかしいこと、恐ろしいことである。⁽⁵⁾—日本に暮らし、日本で起きた水俣病に関わった人ですらそう感じていたとすれば、水俣よりも、ベトナムよりもはるかに遠い南アの問題に当時の日本人の人々の関心を向けることが、どれほど難しかったかは想像がつく。

『南ア通信』No.29 [1968年1月] は、この頃の南部アフリカがすでに「第二のベトナム」と化していると伝えている。No.32 [1968年8月] では、ゲリラ戦に踏み切ったANCのオリバー・タンボが「アフリカ人は数百万の犠牲者を覚悟している」と述べたことを受けて、アメリカがアフリカで

核兵器を使用する危険があるとも指摘している。また『アフリカ行動委員会ニュース』No.5 [1970年2月]は、バジル・デビドソンによるポルトガル領ギニアの状況に関するレポートを翻訳・掲載しているが、そこには、現地に代表として派遣された南ベトナム解放民族戦線中央委員が、遠くに広がる黒煙を見て「ナパームだ。」と苦々しげにつぶやく場面が描かれている [p.1]。

こうしたアフリカのベトナム化にもかかわらず、1970年3月にANCメンバーで詩人のマジシ・クネーネが来日し、政党や労働組合を訪れて資金援助を求めたとき、関心も資金もほとんど得られなかったという。失望したクネーネは“Japan is killing us. Japanese prosperity depends upon our blood”（「日本は俺たちを殺しているんだ。俺たちの血はおまえらの繁栄を支えているんだ」）と言い残して日本を去る。このことは、彼を案内して回ったJAAC-Tokyoのメンバーにとって「相当なショック」となった [楠原 2018:12]。

2-2. さまざまな「恥ずかしさ」

前節で引用した『苦海』や、合化労連新日空労組の『さいれん』[1931号, 1968年8月]に掲載されたいわゆる「恥宣言」のように、問題⁽⁶⁾を知らないこと、知っても動かないことによって、加害者の側に荷担してしまうことの「恥ずかしさ」は、反アパルトヘイト運動でも頻繁に語られている。

「仲間」は、早い時期から若いメンバーをアフリカに派遣している [渡辺 2014:9]。派遣第一号となった風間実良（明治大学）は、1965年9月、「ベトナム号」で横浜港から出発した。楠原も1966年9月、「カンボジア号」でアフリカに渡ったが、後年、立教大学で開催された講演会で「アジア経由でアフリカに行くこと」の重要性を語っている。「旧植民地のアジアの港に泊まりながら」航海を進めていくことで、「日本人は手が汚れている」と感じ、「日本のアジア諸国への侵略」に気づかされていった、というのである [楠原 2018:8]。こうした渡航経験を通して、若い運動の担い手たちはアジアやアフリカの現実に触れ、日本人の加害性について考えることになった。

一方で彼らは、日本の労働運動とも深く結びついていた。『アフリカ・日本』創刊号 [1964年8月]には、全港湾など労組の支援に感謝する言葉が連ねられている。さらに印象的なのは、No.3 [1964年10月]に掲載された記事である。それによると、「仲間」のメンバーはある日、自作の南ア問題のスライドを持って品川のある工場を訪れ、工場の倉庫に自衛隊のトラック用と思われるヘッドライトが山のように積まれているのを見る。そのことには誰一人触れないまま集まりは進行するが、別れぎわに仲間の一人がふと「春闘はどうでしたか」とたずねると、若い労働者が「春闘でようやく三千円勝ちとったんですがね、まだ払ってもらってないんですよ」と答えた。その一言が「私たちの胸にキリリと刺さった」と記事は伝えている。厳しい労働条件で働く（そして、もしかするとそのつらい労働によって戦争や抑圧に加担してしまっている）若者に、学生である自分が、遠い南アの状況について何ごとかを伝えようとするものの「苦痛と恥ずかしさ」を、彼らは「身にしみて感じさせられた」のである [渡辺 2014:6]。こうした経験と学びを通して、日本で働く者の生きづらさと、アジア・アフリカの人々が置かれた過酷な状況とが結びつくとともに、南アでたたかう人々が経済制裁を求めるとき、日本の働く者がそれにこたえることは「とてつもなく大変な試練」[『アフリカ・日本』, No.3, p.2] であるというとならえ方につながっていく。

高度経済成長下で生きることは、他者の苦しみから「恩恵」を受けることを意味し、そのことが私

たち自身をも苦しめているという自覚は、同時代の多くの運動でも見られる。しかし、例えば1964年2月の『南ア通信』[No.4]は、日本人が「アジア・アフリカ諸国のなかでただ一国、＜火事場どろぼう＞＜ストライキ破り＞をやっている国民」[p.3]だとしている。アジア・アフリカ諸国が南アの黒人との連帯のため経済制裁を行うなか、日本だけが貿易を行っていたからである。そして1966年頃には、アパルトヘイトの南アと「貿易関係を拡大しているただひとつの非西欧国」である日本は「南アの第4位の大顧客」[『南ア通信』No.20, 1966年6月, p.13]となる。そして「これに対する感謝の気持(?)が、日本人に対す(る)“名誉白人”という名称になって」[下垣1973:5]、表向きは白人と同等に扱われるようになっていた。そして、それを本気で「名誉」と思い、非白人に対して差別的なふるまいをする日本人もいた[『南ア通信』No.25, 1967年2月, p.2]。そのことが、反アパルトヘイト運動に固有の「恥ずかしさ」の感覚をもたらしとともに、強い怒りを呼び起こす力ともなった。「『名誉白人』なんてごめんだ！」は、「私はアパルトヘイトを許さない！」と並んでJAACの核をなす二つのスローガンとして用いられ[楠原2015:13]、それぞれの思いで運動に参加する人々を結びつけた。また、『こむらど』第4号[1973年6月]も、「私たちはフォルスター(南アの首相)から“名誉白人”とよばれるよりも、A.ンゾー⁽⁷⁾氏から“コムラッド”(連滞^{ママ}できる仲間)とよばれる道を選ばなければ」ならないとの決意を示している[p.5]。

2-3. 「真に人間の生きるに値する」世界

『ベ平連ニュース』終刊(101)号[1974年3月]で小田実は、「私たちは新しい世の中のありよう」つまり「日本人をふくめたアジアの人々の全体のくらしが政府・大企業・大資本によって奪われているという事態」に「直面している」と書いた⁽⁸⁾。三里塚の若者は、政府や空港公団が「百姓を人間と見なさない」からこそ、「一片の相談もなしに空港建設をきめ」、反対する農民を弾圧するのだと考えた。「水俣病を告発する会」の『告発』を学校に掲示した高校生もまた、「『人間破壊』を、毎日の授業、「教育」によって受けている」と獄中の友に書き送った⁽⁹⁾。横浜新貨物線に反対する女性は『月刊 地域闘争』の座談会で、「仮にマッチ箱みたいのうちでも、本当に、私たちのかけがえのないうちなんですもの。それをなんの前ぶれもなく、一つの線を引かれちまって、あんたどきなさいといわれたんじゃ立場があまりにもひどすぎるものね。」と語った⁽¹⁰⁾。日本に生きるたくさんの「私」が、人間らしい暮らしを「奪われている」と感じていたのである。

「白人ではない」ということのみによって様々な権利や資源へのアクセスを否定されている南アの非白人人口が直面している状況は過酷である。しかし人間らしい生き方を奪われているという点では、日本に暮らす人々も同じだった。そうした「生きづらさ」に、それぞれの生活の場で向き合うことを、他の運動と同じく反アパルトヘイト運動も大切にした。彼らにとって「連帯の第一歩」は、「違った国々の民衆相互の、生きづらさのリアルな認識」[『アフリカ・日本』, No.6, 1965年10月, p.2]にあったのである。

「アジア・アフリカの仲間」の若者たちは、グループの誕生にあたり、アジア・アフリカ作家会議の事務局長であった堀田善衛から「若い仲間へ」という文章を受け取っている。その中で堀田は、アジア・アフリカ諸国についての知識と認識を深めることが、「われわれ自身の人生を豊かにし」「日常生活をみる眼の力を強めることに役立つ」はずで、それが「AA諸国を含む全世界、そこからあ

なた方が中堅として生きる筈の 21 世紀の世界が、真に人間の生きるに値するものにするため」になるのだ、と書いている [堀田 2014]。「真に人間の生きるに値する」世界が実現するかどうかは誰にもわからない。しかし、様々な「生きづらさ」を生活の中で意識し、「生きるに値する」世界を目指して悩み、動き、出会うことのなかには、すでにそれだけで世界を「生きるに値する」ものにする何かがある一反アパルトヘイト運動、そして同時代の社会運動の記録は、そう語っているように筆者には思えるのである。

3. アパルトヘイトとアーカイブズ—⁽¹²⁾おわりに

さて、牧野らの尽力により日本の反アパルトヘイト運動の記録（の少なくとも重要な一部）は保存され、誰でも利用可能な状態になった。同様に、世界各地で南アでの闘争を支えた運動体の記録も、それぞれの地域で保存されている。例えば日本の運動とも交流があったロンドンの Anti-Apartheid Movement のアーカイブズは、オックスフォード大学ボドリアン図書館に所蔵され、⁽¹³⁾オランダの反アパルトヘイト運動で重要な役割を果たした Dutch Anti-Apartheid Movement (Anti-Apartheids Beweging Nederland: AABN), the Eduardo Mondlane Foundation (EMS), そして Holland Committee on Southern Africa (Komitee Zuidelijk Afrika: KZA) のアーカイブズは、⁽¹⁴⁾アムステルダム国際社会史研究所に移管されている。

一方、アパルトヘイト時代の南アでは、国立公文書館 (State Archives Service (SAS)) はアパルトヘイト体制を支える装置の一つであった [Harris 1996: 7-10]。90 年代初めの体制移行期には膨大な公文書が意図的に廃棄され、政府による人権侵害の立証を難しくした。また、オラリティを大切にす文化、教育機会の制限、運動の激しい弾圧（記録を残すことの危険性）、運動家の暗殺や亡命などが、反アパルトヘイト運動の記録が残りにくい要因となっていた。

しかし、70 年代には黒人意識運動が、自らの記録を残す意義を語るようになったという [McEwan 2003: 742]。さらに 80 年代には反アパルトヘイト運動組織が、主として大学内の資料収集機関（例えばウィットウォーターズランド大学のウィリアム・カレン図書館など）にアーカイブズを寄贈する動きが活発化した。そして 90 年代以降、ANC および Pan African Congress (PAC) のアーカイブズがフォートヘア大学、International Defence and Aid Fund (IDAF) の膨大な記録がウェスタン・ケープ大学のマイブイエ・センターに寄贈されるなど、多くの記録が様々な機関で保存されることになった [Harris 2002: 74-77]。

抑圧の道具でもあった公文書も、解放後は社会正義の実現のために不可欠なものとして [Harris 2011]、1996 年には南アフリカ国立公文書館法が制定された。また、2000 年に制定された情報アクセス促進法は、権利の行使と保護に関する情報へのアクセスを基本的人権の一つとして位置づけた共和国憲法（1996 年）第 32 条第 1 項の規定を受け、市民が企業などの民間組織にも情報公開請求することを認めた先駆的な法律となった。

とはいえ、そうした制度も運用面では課題を抱えていないわけではない [Peekhaus 2014]。真実と和解委員会の調査やアーカイブズ収集の取り組みにおいて、女性たちの物語が十分に包摂されていないという指摘もある [McEwan 2003]。また、カーネギー・メロン財団の助成による反アパルトヘイト運動の資料をデジタル化するプロジェクトは、権利関係をめぐってアメリカ側と南ア側に認識

の相違が生じ、「デジタル帝国主義」という批判が巻き起こったこともあって頓挫した。その結果、デジタル・データはJSTOR上で公開され、研究機関に所属している者であれば世界中のどこからでも閲覧できるようになったが、南アでアパルトヘイトとたたかった貧しい人々はアクセスできない状況が続いているという [Breckenridge 2014]⁽¹⁵⁾。

様々な課題はあるにせよ、反アパルトヘイト運動が残した膨大な記録がそれぞれの地域で保存・公開されていることが、反アパルトヘイト運動の研究や市民レベルでの運動経験の継承を支えていることは確かだ。国際的な連帯運動の一翼を担った日本の反アパルトヘイト運動の記録も、そうした世界中に分散する記録の全体とネットワークするものとしてとらえる必要があるだろう⁽¹⁶⁾。それはまた、日本の反アパルトヘイト運動が、国内の様々な社会運動とネットワークし、問題意識やたまたか一方を共有してきたことの記録でもある。そして牧野らの努力により、日本の反アパルトヘイト運動の経験は世界と共有され始めて⁽¹⁷⁾いる。今後もぜひ、多くの人に活用していただければと思う。

また、社会運動の記録は本来、公文書や企業記録とも密接に関連し合っている。「名誉白人」の呼び名を受け入れた企業の記録にもアクセスできれば（困難とは思いますが）、反アパルトヘイト運動の文脈をより深く理解することが可能となるだろう。それぞれの立場で問題に向き合った多様な主体の記録が、一定の制限はあっても原則としては開かれている—そんな社会でこそ、社会運動の記録はそのほんとうの力を発揮できるのではないだろうか。

註

(1)——南アで、1950年のメーデーに際しANCなどが企画した集会を警官隊が襲撃し、子どもを含む多数の死傷者が出た。これに対してANC、インド人会議、南アフリカ共産党が合同委員会を結成して6月26日を「抗議の日」とすることを呼びかけ、大衆動員に成功。それを記念して、以後この日が南アフリカの「自由の日（フリーダム・デー）」となる。

(2)——科学研究費助成事業データベース <https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-26380227/>

(3)——立命館大学生存学研究中心 arsvi.com「反アパルトヘイト運動」 http://www.arsvi.com/i/aaajp_top.htm

(4)——この部分の執筆にあたっては、二つの資料群の目録、R09「反アパルトヘイト運動関連資料・下垣桂二氏寄贈分リスト」 (<http://dspace.rcccs.rikkyo.ac.jp/handle/11008/1344>) およびR10「反アパルトヘイト運動関連資料・楠原彰氏寄贈分リスト」 (<http://dspace.rcccs.rikkyo.ac.jp/handle/11008/1345>) のほか、渡辺 [2014]、楠原 [2014]、Makino [2014]、Makino [2018] ほかの文献を参照した。

(5)——国立歴史民俗博物館企画展示図録『「1968年」無数の問いの噴出の時代』（以下、「68図録」という。）、

96頁掲載。

(6)——68図録、94頁掲載。

(7)——アルフレッド・ンゾー(Alfred Nzo), ANC書記長。

(8)——68図録、42頁掲載。

(9)——三里塚芝山連合空港反対同盟三里塚高校生協議会 1971「百姓だって人間だ！」68図録、76頁掲載。

(10)——神奈川の一高校生1970「獄中の友へ」68図録、100頁掲載。

(11)——栗竹ルイほか 1975「新春放談会 生きがいとまでは言わなくても」『月刊地域闘争』1975年1月号、27頁。68図録、119頁掲載。

(12)——この章の国際的な反アパルトヘイト運動の保存については、立教で2016年に開催された公開講演会での牧野氏の報告 [牧野 2018] に大きな示唆を受けた。

(13)——Forward to Freedom: The history of the British Anti-Apartheid Movement 1959-1994. <http://www.aamarchives.org/>

(14)——International Institute of Social History. The Netherlands against Apartheid. <https://socialhistory.org/en/collections/netherlands-against-apartheid-1948-1994>

(15)——この文献についてご教示くださった牧野氏に感謝

する。

(16) —Nelson Mandela Foundation. Anti-apartheid movement archives から、そうしたアーカイブズのリストにリンクされていたが、2018年5月19日現在リンク切れとなっているようである。 <https://www.nelsonmandela.org/content/page/anti-apartheid-movement-archives1>

(17) —参考文献に挙げた牧野の各論文に加え、2018年にはSouth African Democracy Education Trust (SADET)

(ed.) *The Road to Democracy in South Africa*, Vol. 3: International Solidarity, Part 3, Pan African University Press and Unisa Press に、反アパルトヘイト運動に深く関わった津山直子（アフリカ日本協議会代表理事）と牧野の共著論文“The Anti-Apartheid Solidarity Movement in Japan: Actors, Networks and Issues”が収録された。同書の詳細は http://www.sadet.co.za/road_democracy_vol3_3.html を参照のこと。

(URLは全て2018年5月19日最終確認)

引用文献

- Breckenridge, Keith 2014 The Politics of the Parallel Archive: Digital Imperialism and the Future of Record-Keeping in the Age of Digital Reproduction. *Journal of Southern African Studies*, vol. 40, no. 3, pp.499-519. <http://dx.doi.org/10.1080/03057070.2014.913427>
- Harris, Verne 1996 Redefining Archives in South Africa; Public Archives and Society in Transition, 1990-1996. *Archivaria*, 42, pp.6-27. <https://archivaria.ca/index.php/archivaria/article/view/12151/13155>
- Harris, Verne 2002 The Archival Slivers: Power, Memory, and Archives in South Africa. *Archival Science*, vol.2, issue 1-2, pp.63-86. <https://doi.org/10.1007/BF024435631>
- Harris, Verne 2011 Jacques Derrida meets Nelson Mandela: archival ethics at the endgame. *Archival Science*, vol.11, issue 1-2, pp.113-124. <https://doi.org/10.1007/s10502-010-9111-4>
- 堀田善衛 2014 「若い仲間へ」『同人誌「こんてぬうあ」』第6号, 57～58頁。
- 楠原 彰 2015a 「反アパルトヘイト運動の経験を振り返る—アフリカ行動委員会の運動を中心に」『アフリカNOW』（特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会）No.102, 4～14頁。
- 楠原 彰 2015b 日本の反アパルトヘイト運動年表—アフリカ行動委員会（JAAC-Tokyo）の運動を中心に。『アフリカNOW』（特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会）No.102, 4～14頁。
- 楠原 彰 2018 「遠い国の人びとの深い悲しみや怒りと向き合う—また、その<記憶>の残し方」『立教大学共生社会研究センター公開講演会「反アパルトヘイト運動を記憶する」（2016年12月17日開催）講演・質疑の記録』（立教大学共生社会研究センター），6～16頁。
- 楠原 彰（編）2014 「「アジア・アフリカの仲間」の歩み—土屋とみ枝氏のメモによる」『同人誌「こんてぬうあ」』, 第6号, 55～82頁。
- Makino, Kumiko 2014 The anti-apartheid movement in Japan: an overview. IDE Discussion Paper 440. <http://hdl.handle.net/2344/1295>
- 牧野久美子 2015 「特集にあたって いま日本の反アパルトヘイト運動から学ぶ」『アフリカNOW』（特定非営利活動法人 アフリカ日本協議会）No.102, 3頁。
- Makino, Kumiko 2018 Travelling for Solidarity: Japanese Activists in the Transnational Anti-apartheid Movement. In: S. Cornelissen, Y. Mine (eds.), *Migration and Agency in a Globalizing World*, International Political Economy Series, Palgrave Macmillan, London, pp. 247-270. https://doi.org/10.1057/978-1-137-60205-3_12
- 牧野久美子 2018 「反アパルトヘイト運動は世界でどう記録／記憶されてきたか」『立教大学共生社会研究センター公開講演会「反アパルトヘイト運動を記憶する」（2016年12月17日開催）講演・質疑の記録』（立教大学共生社会研究センター），26～35頁。 URL : <http://hdl.handle.net/11008/1350>
- McEwan, Cheryl 2003 Building a Postcolonial Archive? Gender, Collective Memory and Citizenship in Post-Apartheid South Africa. *Journal of Southern African Studies*, vol.29, no.3, pp.739-757. <http://www.jstor.org/stable/3557440>
- 野間寛二郎 1965 「南アフリカ“自由の日”を三たび迎えて」『南ア通信』（南アフリカ問題懇話会），No.15, 2頁。
- Peekhaus, Wilhelm 2014 South Africa's *Promotion of Access to Information Act*: An Analysis of Relevant Jurisprudence. *Journal of Information Policy*, vol.4, pp.570-596. <http://www.jstor.org/stable/10.5325/jinfopoli.4.2014.0570>
- 下垣桂二 2018 「関西の反アパルトヘイト運動は反差別、人権のたたかいとともに」『立教大学共生社会研究セン

-
- ター公開講演会「反アパルトヘイト運動を記憶する」(2016年12月17日開催) 講演・質疑の記録』(立教大学共生社会研究センター), 17～25頁。 <http://hdl.handle.net/11008/1350>
- 下垣桂二 1973 「私は日本人・・・アパルトヘイトと関係あるの?」『こむらど』(こむらどアフリカ委員会), 第4号, 3～6頁。
- 渡辺一夫 2014 「土屋とみ枝さんとアジア・アフリカの仲間」『同人誌「こんてぬうあ」』, 第6号, 5～12頁。
(URLは全て2018年5月19日最終確認)

(立教大学共生社会研究センター, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2018年5月20日受付, 2018年8月3日審査終了)